SE

の本質を抉ったものとしては、

そうしたなかで、中曹根政権

内外政治にたいする関民の不安 題」)が、ともに中曽根政権の

を代弁している。

質」(世界)が屈指の力作であ

山口定一中曽根政権の位置と本

った。山口は、中崩根派を一高

自相の外交感覚」(「今週の問

第斤

中曽根政権にかんしては、

恐れ」(経済往来)、「週刊東 木浩一「中曽根政治への期待と

洋経済」(一月二十二日号)の

居門

今月の論壇は政局にかんする

語が賑わっている。その一つ 中曹根政権論であり、二つ

(シチリ)

983. 2. 24.

た政治にへの不安 「メリハリの効い

平、政権を担うことのみを

念願 口は大丈夫か。 カ月。首相自身は、三十有余 できたといわれるだけに、 かに見えるが、果たして先 ずる中曽根政権が登場して メリハリの効いた政治」を

ショナリスト集団」として位置 **産官僚**)からはずれた戦中派ナ ッシュメントの主流(大蔵・通 経済成長期の官僚エスタブリ

などではない」と見做(みな) このような中層根政権がいう

決定的に依拠しているとはいえ はその意味では、田中の支援に 衰弱のためであり、「中曽根氏 でも、「保守本流」の走り使い

嶺 雄 れると説く理性の声を『ソ連の 紀」で、「軍事化以外の進によ ってこそわが国の安全は保障さ 推奨したい好評論であった。 今月の『世界』は「編集後 が、中曽根政権論としてはぜい 私は、多くの点で山口の考え方 と異なった見解に立つ者である くも指摘している点は、実に鋭

タカ派外務信贷の胎動」をはら

「新しい軍部官僚、

中

嶋

な最近の風潮に警鐘を鳴らして は、それだけ「右傾化」が著し ばしば共感するところが多い が、最近、『世界』の論画にし いる。従来、『世界』の編集方 同調者」として一蹴する」よう れともソ連縮威論の新たな流行 いことの証しなのだろうか、そ

当然の帰結』に怒り 欲望の政治学の

> 派は河合塾のようなものだ。多そのことで自分の罪を免がれた くの受験生を集めて代職士にいがために、われわれは騒いで

月、『中央公論』では「中川一 友としても知られた伊藤は、今 階秘 論官をつとめ、大平正芳の た。かつて池田勇人首相の首 (Voice) がやはり光って 直哉「宰相の

志とは何か」 次に田中角栄諭としては、伊 委員長にし、大臣にする。きわ する腹立たしごを表明してい まるところ、総理大臣までつくやらのいやらしさ、あるいは、 ってしまった」と述べ、「欲望 し、さらに政務次官にし、幣任

条とかを人に強制してはいけな

見事な熟年ぶりを物語ってい

掴んで、信長を諌めて死んだを

はない。むしろ私は、若言目の という月並のせりふは捧げたく 郷に対し、「冥福を祈る」など

同時にこの言葉が最近の野坂の の言葉の意味は重く深く、また はもはやいらない」という野坂

かがわしさ。倫理とか宗教的信 政治倫理がどうしたとやらのい 「論告求刑の夜の、提燈デモと在であった。そして、田中さん

いるのではないか」といい、

に、やはり団中さんは必要な存 て、少しはまどもになるため

(現代)天「私は中川一郎の 政治の暗黒が中川を殺した そして藤原弘達は一般いがた

「天皇制官僚国家から脱皮し

数野

縣夫· 画

き崩す条件」を語り、『エコノ ろう。この点で野坂昭如「田中 は、期待にたがわぬ文章であっ 角度からの切り込みも必要であ かんしても、「聖なる存在を、 た。野坂は、ロッキード事件に だが、田中角栄論には、別の の暗さを一知っている野坂のネ係。の真相」(現代)がともに しないのか」という自説を基調 うして一方で、天皇制を問題にが論じていた。そのなかでは、 ボティズム(地縁主義)に由来 は、「新潟三区の雪の深ご、夜 国夫「中川一郎 "死の三角関 中さんをうんぬんするなら、ど中川一郎の死についても各誌 一上指摘する。野坂は、「田

田原総一朗「中川一郎の死心」ている。たしかに中川一郎の死

らいの、やるせない憤りがいと

老の霊前にぶつけてやりたい。

いよ夢るばかりである」と語っ

を此視すればするほど、中間根

首相の華やぎが軽薄に思われて

嗅覚によ

川一郎の"怪死"をめぐる議論

田中角栄論であり、三つは、中 は、ロッキード求刑に関連した

野坂昭如「田中角栄の俗と聖」

期待にたがわぬ角栄論

きわまりない「過度の単純化」 は『暴走』政治にほかならず、 『わかりやすい政治』とは危険

づけたうえで、中間根・保守 本流」(鈴木派)と巡「保守本 流」(補田派)のゆきづまりと 「傍流」政権の登場は、「保守 僚エスタブリッシュメント内部 に再編成が進んでいる」とし はいう。しかも、「これまでの 「保守本流」の差盤であった官 の政治にほかならない」と山口「ミスト」(二月八日母)でも、一角栄の俗と、翌」(中央、公論) にしているのだが、その立論 労の核心に追る」(海)、内藤 は、「機能からいえば、田中 郎を絶望死させた闇の支配を突 わる」を論述している。 「求刑で『田中支配』はどう変 右の『Voice』論文で伊藤

するなどとはいうまい。日本が 死」を逐(お)っている。 迫力のある筆致で中川の「怪 (東外大教授・国際関係論)